

PREVENTION No. 172

平成18年12月21日開催

看護師としてのアルコール依存症患者への関わり

独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター 桜井 延代

1. 久里浜アルコール症センターの治療体系

A. 外来治療

B. 入院治療(入院治療は年齢・性別で入院病棟が決まる)

- ①女性(8W アルコール内科病棟)
- ②男性(短期治療 6W アルコール内科病棟)
- ③男性(65歳まで 8W 壮年期アルコール病棟)
- ④男性(65歳から 8W 老年期アルコール病棟)
- ⑤男性(再飲酒防止プログラム 6W アルコール内科病棟)

2. アルコール依存症の看護の基本

- ・アルコール依存症に対する正しい知識を持つ
- ・患者と医療者の信頼関係を築く
- ・治療環境を整え、患者が規則正しい生活を身に付けられるよう援助する
- ・モチベーションを持たせ、断酒の3本柱(抗酒剤服用・定期通院・自助グループへの参加)の大切さを理解させる

3. 第Ⅰ期治療の看護(最初に入院する病棟で主に内科治療)

- ・離脱症状の観察
- ・身体合併症の治療や内科検査への看護
- ・日常生活リズムを整えるための援助
- ・第Ⅱ期治療(断酒を継続するための治療)移行への援助患者自身がアルコール依存症と向き合うための方向性、動機づけを行っていく

4. 第Ⅱ期治療の看護(アルコール依存症リハビリテーションプログラム)

*飲酒なしで生活出来るよう学ぶ。外来治療では断酒継続が困難な患者を対象にしている

- ・患者の中のお酒に結びつきやすい考え方を把握し、患者がその歪みに気づき行動が変えられるよう支援する
- ・認知行動療法の中で、振り返りと具体策を考えていく
- ・8週間のプログラムを終了し、退院時に酒に対する見方、考え方を修正できた場合は、看護の目標を達成したと考える

5. II期治療病棟での事例紹介

1) 事例1 (自助グループへ繋がっている) 男性 36歳 3回目入院

入院時より断酒の意思は強く持っていた。認知行動療法でも飲酒問題や再飲酒の引き金になった事について振り返りも出来ていた。退院後の断酒の具体策(3本柱)も立てられたが、漠然とした退院後の不安があった。受け持ち看護師が個別のオリエンテーションで患者の気持ちを受け止め、具体的に何が実践できるのか共に考え。退院後はAAに参加し、退院5ヶ月後より月1回の病棟AAメッセージに来ている。

① 看護の関わり

主治医には表面的な受け答えしかしないが、看護師には本音をぶつけてくる。特に退院が近くなると不安になり、接触欲求、イライラして会話も強い口調になる、眠れないため眠剤の追加等が見られる。看護師はそのサインを見逃さず、いつでも聴く姿勢を持ち、タイミングを見て関わっている。

2) 事例2 (外泊訓練で2回飲酒し強制退院) 男性 47歳 初回入院

I期治療では入院当初「うつで、入院した。アルコール依存症とは言われていない」とアルコール問題を否認していた。II期治療では認知行動療法1回目で、看護師が同席する事や記録をする事に不満、「一対一なら良いが、看護師が入るところでは安心して話せない。自分はうつ病と言われここに来ている」と飲酒問題に対して否認。認知行動療法5回目まで終始「うつがあるから飲んでいて、アルコール問題はない。断酒でなく禁酒でいく」と発言していた。最初に外出時、昼食に寿司を食べた後缶ビール1本飲酒して帰棟。次に、1泊外泊訓練では日曜日16時帰院予定であったが、発熱を理由に延泊、3日後に帰院。3回目は2泊外泊訓練で、帰院日電話で発熱を理由に延泊、2日後帰院。呼気テスト陽性でも看護師に対しては飲酒を否定。主治医の面接では日曜日の朝までビール500mlを数本飲んでいと話す。飲酒して帰院2回目のため、治療契約で強制退院となった。

① 看護の関わり

この事例は、最後まで患者との関係がうまく築けなかった。振り返ってみると、患者は飲酒欲求が最初から強く、飲みたい気持ちのイライラのはげ口として、看護師や他スタッフの不満、時に攻撃的な発言として表れていたのではないかと。

周囲を困らせる患者の行動(攻撃的・暴言を吐く・あげ足を取る等)は、時として陰性感情を持ってしまいます。しかし、患者の行動の裏には「不安・罪悪感・自己否定・飲酒欲求へのイライラ」等がある事を理解し、その時がチームで患者に関わるチャンスとして捉え関わっている。

6. アルコール依存症看護のまとめ

患者が自分の問題行動の背景にある認知の偏りに気づき、行動を変容するプロセスをするサポートする。また、アルコール依存症がどのようなプロセスを経過しながら進行してきたか理解し、地域社会の中で断酒が継続する事が出来るよう通院・抗酒剤の服用・自助グループへの参加の必要性の動機づけと指導や家族への支援をする。

患者の大きなエネルギーに関わると、看護者も振り回され、気持ちを理解しようと一生懸命関われば関わるほど患者との良い距離を見失う事もある。しかし、そうした環境の中で、看護者自身も成長し、仕事の意義や看護の魅力を見つけながら日々患者と関わっています。